東京芸術劇場コンサートオペラ vol.2

G.ヴェルディ 歌劇「ドン・カルロス」

DON CARLOS

Giuseppe Verdi ◎ Version Paris en 5 actes

パリ初演版・フランス語全5幕〔日本初演〕演奏会形式

―東京芸術劇場『ドン・カルロス』パリ版 日本初演に寄せて―

理解への第一歩は「原点を顧みる」ことから

イタリアのヴェルディがなぜパリ・オペラ座のために
フランス語の歌劇を作ったか？　文人たちのドラマを見抜く眼、
世界一と称された金管の演奏水準　―　大作『ドン・カルロス』は、
大作曲家が「言葉の壁」を乗り越えた証なのだ！

ジュゼッペ・ヴェルディは「感情を活かした」作曲家である。彼は喜びなら何度も噛み締め、悔しさは決して忘れなかった。だから、二十年近くも前のオペラでも、弱点を感じたならすぐさま改稿に取り組み、音楽を補強したのである。

でも、だからといって元の「オリジナル版」をお蔵入りにして良いものか?とんでもない!たとえ粗削りの個性でも、若書きの旋律線には若書きなりのエネルギーが溢れている。それはいわば、水を完全に弾(はじ)く十代の素肌のように、有無を言わさぬ健康美を備えたものなのだ。

今回、東京芸術劇場が総力を挙げて取り組む『ドン・カルロス』パリ版日本初演のステージは、まさに、この大作の「素顔」に触れるかけがえのない機会である。原点を知ってこそ成長の度合いも判るというもの。本作に初めて接する人なら、作曲家の初志に先入観なく接することができるし、改訂版『ドン・カルロス（カルロ）』のファン層も、書き直されたページとオリジナルとの違いを目の当たりにして、ヴェルディが本作に傾けた情熱の量に思いを馳せるに違いない。

本作は一般的に『ドン・カルロ Don Carlo』と呼ばれている。その理由は、今は「イタリア語訳詞」での上演が主流であるから。しかし、本来の題は『ドン・カルロス Don Carlos』。仏語ではCarlosのSを発音する。そこで強調しておきたい。今回のパリ版の日本初演は、このオペラにおけるヴェルディの音作りを正しく掴む絶好のチャンスでもあるということを。

フランス語とイタリア語では、単語の字面が似ていても、音の長さや語順が相当に違う。だから、作曲家が歌詞を活かそうと懸命に作ったフレーズでも、訳詞になると違う意味の言葉が滑り込んでしまう。また、子音と音符が反応しての鮮烈な音の燦めきも、詩句のずれで消し飛ぶことが多いのだ。本作で伊語訳詞とは、いわば「育ての母」の立場。世界中で上演される道を作ってやったのだから。でも、「生みの母」の仏語で歌うと、音と言葉の繋がりが一挙に濃密になり、聴く人に驚きを与えるのである。

また、『ドン・カルロス（カルロ）』には5幕版と4幕版の違いも存在する。今回のパリ版は、大まかに言うと「改稿されていない5幕版」になるが、そのまま演奏すると4時間半を超えるので、今回は少しずつ切り詰めて、繰り返しのパッセージやバレエ場面をカットする。でも、5幕版ならではの第1幕が聴けるのは何よりの喜び。王子と王女が出会い、愛を燃え上がらせた途端に引き裂かれるというこの導入部に、ヴェルディがどれほど心を込めて音楽を付けたことか　―　4幕版では決して味わえないこの幕は、実は文豪シラーの原作にはないくだり。フランスの台本作家コンビがアイデアを駆使して作った名場面である。その真価も仏語の歌でいっそう鮮明になるだろう。

今回は、主役カップルから小さな役まで日本の名歌手たちが集い、イタリア生まれながらフランス・オペラにも出演が多い大歌手コロンバーラが国王役で華を添えるという豪華な顔ぶれ。フランスものに通じた最右翼の指揮者、佐藤正浩が彼らを支え、牽引する。この公演で、言葉の壁を乗り越えて最高傑作を世に送ったヴェルディの「凄み」を体感してみよう。

文:岸 純信(オペラ研究家)

東京芸術劇場コンサートオペラvol.2
G.ヴェルディ 歌劇『ドン・カルロス』
9月 6日(土) 15:00開演 コンサートホール

指揮:佐藤正浩
管弦楽:ザ・オペラ・バンド
（在京プロオケメンバーで結成）
コーラス:武蔵野音楽大学（合唱指揮:横山修司）

主催:東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成:平成26年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業

佐藤 正浩（指揮）

©相澤功一
佐野 成宏（ドン・カルロス）

浜田 理恵（エリザベート）

©Eugen Tomas
カルロ・コロンバーラ（フィリップ2世）

©深谷義宣
堀内 康雄（ロドリーグ）

小山 由美（エボリ公女）

妻屋 秀和（宗教裁判長）

ジョン・ハオ（修道士）

鷲尾 麻衣（ティボー）

佐藤 美枝子（天の声）

ジョルジュ・ゴーティエ（レルマ伯爵）

詳細はP13へ

海外オーケストラシリーズⅡ　モントリオール交響楽団

壮麗な音の饗宴ふたたび！泡立ちクリームのようなドビュッシー

カナダの名門モントリオール交響楽団が、
音楽監督ケント・ナガノとともに、６年半ぶりに来日する。
色彩的で豊麗な音色のすばらしさでは世界でも一、二を争う存在、と
定評のあるオーケストラだ。その聴きどころは？

ケント・ナガノ

©E.Miyoshi
五嶋 龍

モントリオール交響楽団は、以前からズービン・メータやシャルル・デュトワらのもとで、世界有数のオケとして知られてきた。特にデュトワの音楽監督在任時代（1978～2002年）にはたくさんのディスクや何度かの来日を通じて、わが国でも大変な人気を得ていたものであった。

このモントリオール響の音楽監督を、2006年に引き継いだのが、我々の日系指揮者ケント・ナガノである。リヨン国立歌劇場音楽監督、ハレ管弦楽団音楽監督、ベルリン・ドイツ響芸術監督、バイエルン州立歌劇場音楽総監督などを歴任した世界屈指の名指揮者だ。

「私が最も大きな影響を受けた指揮者は、小澤征爾さんです」と、ケントは語ったことがあった。「小澤さんは、私たち日系米国人にとって重要な存在でした。私が少年の頃、テレビで小澤さんがサンフランシスコ交響楽団を指揮しているのを見た祖母が、『誇りに思いなさい、日本人がアメリカのオーケストラを率いているのよ！これがどんなに例のない素晴らしいことか、よく見ておきなさい』と言ったのです」。それは、第2次世界大戦で苦労した体験を持つ在米日系人たちの、偽らざる心境であったろう。

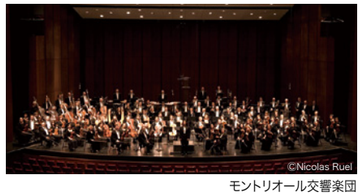
その後ケントは、小澤征爾とサンフランシスコ響のリハーサルを、ホールの裏口からもぐりこんで聴いたりして、指揮者への道を踏み出した。そして、「ボストン交響楽団では小澤さんのアシスタントを務めました。小澤さんは、指揮について私に詳しく教えて下さったのです」。

ケント・ナガノは、すでにモントリオール響とベートーヴェン、ブルックナー、マーラーなどの交響曲のディスクをリリースしている。2008年4月には、この新しいコンビによる初めての来日公演を行なった。

その時の演奏を、実際にお聴きになった方も多いだろう。特にドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』や交響詩『海』、ベルリオーズの『幻想交響曲』、ラヴェルの『ボレロ』など、フランスの作品における音色の壮麗さ、響きのふくよかさは、なんと素晴らしかったことか。『海』での、弦と木管が囁き交わす個所など、まるでふんわりと泡だったクリームがあふれ出すような雰囲気を感じさせていた。ケントは、デュトワの時代に創られたブリリアントな響きを残しつつ、更にその上に彼独自の瑞々しい柔らかい音色を植えつけ、このオーケストラを完全に自己のものにしていたのであった。

あれから6年、このコンビは、ますます快調な進撃を続けている。両者の呼吸も、更に完璧な状態に達しているだろう。今年3月に行われた大規模な欧州ツアーも成功裡に結ばれたということだ。今秋の来日公演の曲目にも、あの『海』が入っているのがうれしい。そして、フランスの大作曲家ラヴェルが彼の流儀で色彩的に編曲したムソルグスキーの『展覧会の絵』も含まれる。これらは、来日直前のモントリオールでの9月定期のプログラムにも入っているので、私たちはその「完成された」演奏が聴けるに違いない。それに加え、素晴らしい若手・五嶋龍が弾くストラヴィンスキーの「ヴァイオリン協奏曲」がある。鮮烈な演奏が聴けるだろう。

文:東条碩夫(音楽評論)
※ケント・ナガノのコメントは、筆者のインタヴューによる


©Nicolas Ruel
モントリオール交響楽団

海外オーケストラシリーズ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

フランス国立リヨン管弦楽団
7月19日(土)15:00開演 コンサートホール
指揮:レナード・スラットキン
ピアノ:小菅 優
管弦楽:フランス国立リヨン管弦楽団
ラヴェル／組曲『マ・メール・ロワ』
ピアノ協奏曲 ト長調
サン＝サーンス／交響曲第3番 op.78「オルガン付き」
S席12,000円　A席8,000円　B席6,000円
C席5,000円　D席3,000円　※SS席14,000円
主催:東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）／豊島区
助成:平成26年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

©Marco Borggreve
レナード・スラットキン

小菅 優

モントリオール交響楽団
10月10日(金)19:00開演 コンサートホール
指揮:ケント・ナガノ
ヴァイオリン:五嶋 龍
管弦楽:モントリオール交響楽団
ドビュッシー／交響詩『海』
ストラヴィンスキー／ヴァイオリン協奏曲 ニ調
ムソルグスキー（ラヴェル編曲）／組曲『展覧会の絵』
S席18,000円　A席13,000円　B席9,000円
C席5,000円　D席3,000円　※SS席22,000円
主催:東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

フィルハーモニア管弦楽団
2015年 3月 7日(土)14:00開演 コンサートホール
指揮:エサ＝ペッカ・サロネン
ヴァイオリン:ヒラリー・ハーン
管弦楽:フィルハーモニア管弦楽団
シベリウス／交響詩『トゥオネラの白鳥』
ブラームス／ヴァイオリン協奏曲
ベートーヴェン／交響曲第3番 変ホ長調『英雄』
S席19,000円　A席15,000円　B席11,000円
C席7,000円　D席4,000円　※SS席22,000円
発売日:10月7日(火)
主催:東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

©NKASSARA/DG
エサ＝ペッカ・サロネン

©Peter Miller
ヒラリー・ハーン